



みんな「ごっこ」で出来てくる

先日、運動会に変えて、あおぞら(4歳)、とり(5歳)それぞれを2日にわけ、いつもの時間ではあったのですが、パラバルーンやリレー遊びに取り組み運動遊びの参観日を設けました。

お仕事等で参観できない保護者もあるかと、当日は動画撮影を試みたのですが、そこには一抹の不安がありました。

今や誰でもどこでも、手軽に動画が撮影できるようになったことに加え、その画質も以前とは比べ物ならなくらいのクオリティー。おそろく、家庭の録画機材よりも、ずっと古くてもしかも入門機レベルの園のビデオカメラ。屋外の音声をどこまでキャッチできるのか、目の肥えた視聴者のみなさんに、果たして、ご納得いただけるのかという不安が。

そして迎えた当日。せめてアングルくらはいと三脚を築山に運び、1時間近くも前から、ああでもないこうでもないとしてティング。その様子を見ていた(そ

の日、スナップや集合写真をお願いした)プロのカメラマンの「それ、素晴らしい三脚ですね。」という言葉に、そこですかと、少し悲しげな笑みを返す私。それを終えると、今度は、反対側の園舎の屋上へと向かい、もう一台のカメラのセッティング。築山のカメラにトラブルがあった場合のリザーブとして、2台体制を組んだのでした。

そこから、先ほど築山の頂上に立てたカメラを見下ろし、遠目に「よし」と確認している時、その隣にすつと降ろされたもう一台の三脚。その上に鎮座する、外付けのマイクまで備えた、明らかに高機能な保護者のカメラを見た瞬間、薄日の差し始めた空を、思わず仰ぎ見たのでした：ああ、私たちが撮影する意味が、一体どこにあるというのかと。何も真横に並べなくたって：ならば、その動画



データを貰えはしないかと。そして、密かに心に誓ったのでした：築山からの録画データは、絶対にお蔵入りにしよう。

さて、そのようにして？出来上がった配信動画はいかがだったでしょう。

最初にバルーンを囲み、位置取りをしていくあおぞら(4歳児)の子どもたち。とり(5歳児)とは違って、一発で決まるほど、まだうまい動きはできないのだけれど、なんだかんだと、自分たちで声を掛け合いながら、少しずつ、ドタバタとポジションを調整していく姿。少し間延びしたこうした時間にこそ、4歳児ならではの育ちが表れているのです。

とり(5歳児)のリレー遊びでは、思わぬハプニングもありました。

別れた3チームの人数が異なるため、複数回走る子もいるのですが、周回遅れのチームも出る中、そのやり繰りが正確にリレーされていったのが、途中から保育者たちにも、わから



が面白いようです。それは子どもたちが、バトンを渡し終えてもまた走りたくて、また順番待ちの列に並ぶという「無制限リレー」が大好きなことに

なくなってしまったようでした。

最終的に「やり直そう」ということになったのですが、私はここで、「子どもたちに相談してみる」という選択もあったように思いました。もちろん、保護者の参観もある中、そんな悠長なことはいらない、という大人たちの判断も致し方ないとも思いますが、こういった場面にこそ、5歳児の育ちが発揮されたようにも思うのです。

一旦決まった勝負がやり直しになっても、2回目の勝負が決した後でも、走っている時の真剣な表情とはうって変わって、子どもたちは、さほど順位にこだわりはないように見えました。

ここに、遊びの本質があるような気がします。最終的に勝負がつくことを求めているのではなく、遊びに浸ること自体

も現れています。あの大好きな「鬼ごっこ」でも、永遠に決着はつきません。自分が手渡すバトンで走りが繋がっていくことや、鬼から逃げ回るドキドキ感：結果ではなく、その瞬間が面白くてたまらないのが、「遊び」なのです。

だから、リレー競争ではなく、リレー遊び：さらに言えば、リレーごっこ。バトンゾーンも何となく、多少のシヨートカットも何のその、厳格なルールを求められたら、つまらない。

だって、イメージの中では、自分はちゃんとかつこよくできている：それが、少し背伸びをしながら「ごっこ」の世界を生きる、子どもたちの姿なのだから。

園長 折井誠司

- 編集 誠美保育園
 - 発行人 折井 誠司
 - 印刷所 誠美保育園
 - 発行所 社会福祉法人 誠美福祉会
- 〒192-0364 東京都八王子市南大沢5-1-2
 電話 042-675-1551
 ファックス 042-677-5643
 E-mail sebi@nokken.jp
 http://nokken.jp/